

最

近は「老後を海外で」ということで、定年後の新天地を海外に求める人たちの数が増えている。とくに団塊の世代の大量定年退職にともない、今後、リタイヤ組の海外移住者の数はさらに増えるだろうといわれている。その移住先と目されているのは、マレーシアやインドネシア、タイ、フィリピンなど、比較的物価が安く、日本からも近い東南アジアの国々である。

一年を通じて温暖で、豊かな自然に恵まれたアジアでの暮らしは、日本で疲れた身体と心を癒すにはもってこいかもしれない。人件費も安いので、ある程度の収入があれば、メイドや運転手も雇える。

けれども、当然ながら外国に暮らすというからには、それにもなう問題も多々ある。言葉の問題、文化や習慣の違い、経済格差の問題、治安の悪さ、医療水準の低さなど、じつは「老後を海外で」といっても、ことはそれほど簡単ではない。安さと同環境だけに惹かれてアジアへの移住を企てるとしたら、それはかなり無謀である。

ある程度の問題は金で解決可能かもしれない。しかし、文化や習慣へ

の洞察を抜きにしては、当面のトラブルは解決できても、ストレスはたまりつづけるはずだ。癒されるどころか、人間不信と猜疑心にさいなまれ、あげくのはてに金だけだまし取られてしまうというケースは、けっして稀ではない。

もちろん、それとは逆に、現地の文化や習慣とゆるやかな距離を取りながら、異国での暮らしを愉しんでいる人たちも少なくない。インドネシアのバリ島で紙工芸作家として暮らすNさんも、そのひとりである。

旅の曲者

44

バリ島のNさんの場合

文・写真／田中真知
Tanaka Mochi

イラスト／bozen

体に蓄積してきたストレスがもう限界に来ていたことを、彼は悟った。

思い切りのよい彼は、すぐに行動に移した。仕事を整理し、アパートを引き払い、取るものもとりあえずバリに渡った。あては何もなかった。貯金を食いつぶしながら、バリ島内陸の村のゲストハウスに腰を落ち着け、バリの芸能や絵画を見て回ったりしていた。やがて知り合ったバリ人の画家の質素なアトリエの2階に間借りして、猫を飼いながら、毎日田園風景を眺めつつ暮らすようなシ

ンブルな日々を2、3年、送った。バリ島を訪れたほうがNさんと知り合ったのは、そのころだった。いまから10年ほど前のことだ。

リタイヤ組のように潤沢な資金があるわけでもないNさんにとって、生活の不安はつねにつきまとい続けた。日本に帰って以前のような仕事をする気はもうなかったし、それができないこともわかっていった。バリで観光業をしたり、レストランを営んだりする日本人居住者もいたが、そうした仕事のルーティーンに入っ

てしまつては、日本にいるときと変わりがなかった。Nさんは椰子の油から作った現地の石鹸を日本に送つてわずかな収入を得ながら、細々とした生活を続けていた。

ただ、日本とちがつて、そうした細々とした暮らしが、この島ではちつともみじめではなかった。目の覚めるような田園の美しい風景、遠くから響いているガムランの音、お祭りのにぎわい、ゆるやかに流れる花の香りといった日々の何気ない営みが「いま」という瞬間を豊かに満たしていた。いまここにはいいことを想像して不安がるような心持ちにはなりようがなかった。

そんなNさんと話していたときのこと、彼は「書道をやりたいんだけど、ここにはいい紙がないんだ。だから、自分で紙を作ってみようかと考えている」といった。「面白そうじゃないですか、やってみたらどうですか」とぼくはいった。

ぼくが帰国してから、Nさんは日本から紙漉の本を取り寄せ、島にたくさん生えているバナナの幹の繊維をつかって試行錯誤しながら独学で紙漉をはじめた。編集者だったNさんは職人仕事の経験などまるでなかった。だが、お金はなくても時間だけはたっぷりあった。もともと凝り性だったNさんはほどなくして紙漉



バリの夕暮れ、庭の水まきをするNさん。

の面白さに夢中になる。
バナナの繊維からできる紙には、和紙とはちがった野性的な風合いがある。染め方や手法を変えることで、その表現の幅も広がっていった。さらにできあがった紙を何かに使えな

いだろうか考えたとき、目についたのが隣のロンボク島で漁師が使っている竹を編んで作った伝統的な梁やなだった。独特な造形の梁にバナナの繊維から作った紙を貼ってランプシェードをつくってみた。これがなか

なか味わいのある出来になったため、彼はみずからさまざまな形のランプシェードをデザインするようになった。

それから5年後、ほくがふたたびバリ島を訪れたとき、Nさんは3階建ての工房のある家に引っ越し、数人のバリ人の若い弟子を抱えて本格的に紙漉を行っていた。ランプシェードを中心とした彼の作品を気に入ってくれる人たちが現れ、Nさんはバリ島唯一のバナナペーパーの作家として知られるようになりつつあった。

そして今年の秋、三たび訪れたバリで、またNさんに再会した。Nさんはかつて棚田だった1000坪あまりある敷地に、自分で建てた家に暮らしていた。壊れかけたアトリエの2階で会ったときは雲泥の差だった。庭には自宅とあずまやと工房があり、500本のバナナの木をはじめ、色とりどりの花や木が植えられていた。職人の数は10人以上に増え、Nさんのバナナペーパーはインドネシアの大きなホテルのインテリア

にも使われるようになっていた。

だが、Nさんの印象は初めて会った10年前とほとんど変わっていない。広いとはいえず、その暮らしは、依然としてシンプルそのものだった。生活と仕事に必要な最小限のものしか、身の回りに置かず、使わないものは捨てる。現在の土地は15年契約で借りたというが、上物である家も「ちょうどそのころには、自然と倒れてしまうような」質素で、簡単なつくりにしてあるという。自分がこの家を出ると同時に、家の屋根がドーンと落ちてしまうというのが理想だと、Nさんはいう。

いま彼が力を入れているのはバリ人の弟子の養成だ。彼の若い弟子たちの中には、ここで働くようになるまで時計の読み方を知らなかった者や、電気のスイッチの入れ方を知らなかった者もいる。それほど貧しい育ちの彼らに、独り立ちできるような技術とノウハウを伝えること。外国人である自分にできるのは、そのくらいしかない。Nさんは考えている。



田中真知

たなか まち

【プロフィール】1960年東京生まれ。作家・翻訳家。1990年より1997年までエジプト在住。著書に『アフリカ旅物語（北東部編・中部編）』（凱風社）、「ある夜、ピラミッドで」（旅行者）、「訳書にグラハム・ハンコック『神の刻印』（凱風社）、「惑星の暗号』（翔泳社）など。